

大乘

DAIJO 法話

お礼を申す人生



広島・光行寺住職
かりや こうえい
荻屋 光影

「親鸞聖人のご苦勞を思えば、なんのこれしき…」と言いながら、本堂の階段をゆっくりと上ってこられるご門徒のおばあちゃんがいらっしゃいます。本堂に入られると、うれしそうに「今日もご縁にあわせていただけます。ありがとうございます」と、私に挨拶をされ、ご本尊に手を合わせ、いつもの場所に座られます。そしてご法座が終わり、私が「ようこそお参りくださいました。またお会いしましょう」と声をかけ

ました。またお会いしましょう」と声をかけ、まいました」と寂しそうに言われます。しかし、その後「この人生で出あうべきものに出あえてよかったです」と笑顔でお念仏申されます。さらに「お寺にお参りできないので、朝夕お寺の方を向いて手を合わせ、お礼を申しております」と言われます。同じようにお参りすることが難しくなり、お寺の方を向いて手を合わせ、おられるご門徒さんが何人もおられます。その方々がお寺にお参りしておられた姿を懐かしく思い出すとともに、人生の中で出あうべきものに出あい、お礼を申していくことの大切さを教えていただきます。

浄土真宗はお礼を申すことを大切にしてきました。仏前に座することは、私のお願いをすることではなく、阿弥陀さまの願いを聞き、お礼を

と、おばあちゃんは「いのちがあれば、また参らせていただきます。いつが別れになるかわからん身ですから…」と言われるのです。

そのようなやり取りを、ご法座のたびに繰り返していました。親鸞聖人九十年のご苦勞を、わが身の上にいただきながら、お寺参りを何よりのよろこびとしてお念仏の道を歩んでこられた方です。最近は足腰が弱って、「もうお寺にお参りしてお礼を申すこともできなくなっ

てしまいました。お礼を申すとは、どういうことでしょうか。私たちは毎日いろんなものをいただき、生きています。食事をとるといことは、さまざまないのちをいただいているということ。いただいた後はお礼を申します。私たちの人生は、今日をいただき、出会いをいただき、仏縁をいただいています。いただいているものがあるからお礼を申すのです。いただいているものにお礼を申したら、催促ということになります。いただいているものが先にあることが大切なことです。そしてお礼を申すのは他の人ではなく、私自身です。浄土真宗というお礼を申すとは、もうすでに私の歩むべきお念仏の道をお願いしていることであり、そのいただいているお念仏の道を私が歩むことこそがお礼を申す

ことになるのです。

一方、私たちの人生は失っていくものがたくさんあります。人生の中で三つのものを失っていくと聞かせていただきました。一つは体力です。年を重ねるごとにこれまでできたことができなくなってきました。二つめは親しい人です。長生きをすれば別れも多く、身近な方も見送っていかなければなりません。三つめは存在観です。私という存在は、地位や役職などの肩書があつて社会的に認められていることが多いのですが、頑張つて努力して得た肩書もやがて失っていきます。そのことを教えてくださるご門徒のおばあちゃんがおられます。

お参りに行くと、いつも一人で縁側の戸を開け、お仏間に座って待っていてくださいます。

そのおばあちゃんの口癖は、「つまらんようになりまして」です。「こんにちは、お元気ですか」とお参りすると、「つまらんようになりまして」と声が返ってきます。一緒にお仏壇にお参りをした後、お茶を入れようとして、ポットが上手に使えず、「つまらんようになりました」とつぶやかれます。お茶を飲みながら、世の中や家族の役に立つことは何もできなくなつてしまったことを、「つまらんようになりました」と何度も言われるのです。しかし、卑屈になつて言われているではありません。満面の笑顔で「つまらんようになりました」と言われるのです。私にとってそのお姿は決してつまらないものではなく、むしろ尊い人生を歩まれているように思えます。どんなに体力を失つても、ど



カット 長井多美栄

んなに別れが多くても、どんなにできることが少なくなつても、その失っていく一つ一つを無駄にすることなく、人生の尊い仏縁といただくれ、仏前に座つてお礼を申しておられます。

親鸞聖人はご自身が苦勞してきたとは言われません。私が苦勞し、努力し、賢くなつて救われていくのではなく、阿弥陀さまという仏さまが私を救うためにご苦勞してくださつたお念仏の道をいただくことができました。お念仏の道は、どのような人生を歩もうとも、つまらないものや無駄なものは何一つなく、すべてが私を育ててくださる尊い仏縁となつていただけるところにお礼を申す人生があります。失っていく人生の中でいただいている仏縁をよろこび、お礼を申す人生を歩ませていただきますように。